ISSN 0389-1984
東京都新宿区西新宿2丁目1番1号
新宿三井ビル37F(〒163)
TEL.(03)344-1701～3

トヨタ財団レポート
THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

Apr. 1988 No. 44

第47回理事会開催

1988(昭和63)年度の事業計画を決定

トヨタ財団では，去る3月17日(木)，第47回理事会を東京都内において開催し，第5回研究コンクールの予備研究助成対象などを決定するとともに，1988年度の事業計画を決定した。

これにより，昨年度の助成実績は5億2,612万円，本年度の助成予定額は，5億2,100万円となった。その内訳は，下表に示すとおりである。

●第5回研究コンクールの予備研究助成対象決定

“身近な環境をみつめよう”をテーマとする研究コンクールの第5回については，全国から121件の応募があり，選考の結果18チームが予備研究の助成対象として決定した。(P.2～3参照)

●研究助成の公募は5月末日まで

本年度も4月1日より研究助成の公募を開始した。

基本テーマは昨年度と同様『新しい人間社会の探求』であるが，重点課題は，「高度技術社会への対応」および「多文化社会への対応」となっている。

なお，研究種別については，個人奨励（第Ⅰ種）研究，試行・準備（第Ⅱ種）研究，総合（第Ⅲ種）研究となっている。(P.6参照)

●市民活動助成の公募も5月末日まで

昨年度までのプログラム名称「活動記録助成」を本年度より「市民活動助成」と改め，引続き『新しい人間社会を目指した市民活動の記録の作成』に関する助成の公募を4月1日より開始した。

1987年度助成実績および1988年度助成予定

事業項目	1987年度助成実績		1988年度助成予定
1．研究助成	68件	200,700,000円	200,000,000円
2．特別研究助成	1	10,000,000	10,000,000
3．市民活動助成	16	23,800,000	25,000,000
4．研究コンクール助成（第5回）	18	9,550,000	30,000,000
5．国際助成	88	127,190,000	120,000,000
6．翻訳出版促進助成（「隣プロ」）	17	57,720,000	60,000,000
7．東南アジア研究英訳刊行助成	1	14,530,000	15,000,000
8．フォーラム助成	6	15,300,000	18,000,000
9．民間助成活動促進助成	2	14,300,000	13,000,000
10．成果発表助成	19	31,880,000	30,000,000
11．その他の助成	2	21,150,000	――
合計	238件	526,120,000円	521,000,000円

おもな内容

◈第5回研究コンクール予備研究の選考を終えて…2
◈第5回研究コンクール予備研究助成対象一覧…3
◈いま，東南アジア文学が面白い！……4
◈まだまだ幼い日本の市民活動……5
◈研究助成の公募にあたって，他……6
◈新刊紹介，他……7
◈最近の報告書から，他……8

●国際助成の応募は年中受付

主に東南アジアの人々（グループもしくは個人）によって現地で行われる固有文化の保存と振興に関するプロジェクトに助成するもので，公募期間は特に定めず，年中打診や応募に応じている。

●成果発表助成の申請も年中受付

当財団の助成による成果の印刷・出版，シンポジウムの開催などに関する成果発表の助成は年中受付けている。

第24回研究報告会を開催……

去る3月12日(土)，『近代日中交流史の諸相』と題する研究報告会を国際文化会館（東京・六本木）にて開催した。(P.6～7参照)

第5回研究コンクール

予備研究の選考を終えて

選考委員長　　小原　秀雄

去る2月24日午後，予定時間を1時間半近くも越える審議の末，ようやく予備研究の助成対象の選考を終えた。選考経過および採択となったものの推薦理由等，詳細については，「第5回研究コンクール・経過資料①*」をお読みいただきたい。その中では，高く評価された点だけではなく，問題点や疑問点として指摘されたことについても触れるようにした。これらを読んでいただけば，具体的にどういうことが審議されたかがお分かりいただけると思う。ここでは，選考経過と審査にあたっての主な論点について簡単に触れておきたい。

◇大きく分散した委員の評価

今回の研究コンクールには全国の各地から121件の応募があった。前回の140件には及ばなかったが，前々回の86件に比べるとかなりの数字である。私を含め10名の選考委員は，約1ヵ月の間にこれらすべてに目を通し，それぞれの申請をＡＢＣの3段階で評価した。Ａはそれぞれの委員が高く評価し，ぜひ推薦したいとするもので各自10件前後に限った。各委員の評価は大きく分散した。8人以上がＡとしたもの，すなわち推薦8以上は無く，推薦7，6，5，がそれぞれ1件，推薦4が5件，推薦3が7件，推薦2が9件，推薦1が30件となっており，推薦あったものの累計は54件となっている。

全申請の半分近くは選考委員の誰かが高く評価したことになる。しかし，そのうちの半数以上（30件）は推薦1ということで，他の委員からは必ずしもあまり高く評価されていない。このような市民中心型，住民発想型の研究については共通の評価尺度がないため，見方や考え方をちょっと変えると評価も大きく変わる。それが選考の難しさでもあり，また面白さでもあろう。5人（半数）以上の委員が推した3件についてすら，誰かはＣをつけているという状況で，賛否の対立は随所に現れていた。選考委員会では，これらの結果をもとに審議した。しかし，数字だけを基準に判断することは避けた。ＡＢＣのもつ意味内容は各委員やそれぞれの申請によって違うはずであるから，まず実質的な評価の中味を報告しあい，お互いに賛否を述べあった上で審議し採択か否かを決めていった。その結果，大筋としてはＡ評価の多いものが残ることになったが，Ａが3や2で不採択になったものもあるし，Ａが1で採択になったものもある。

◇選考委員会での主な論点

当日の審議内容から，どういう点が議論になったかについて少し触れておこう。

ひとつは，『発想の斬新さ』か『方法の着実性』かということである。残念ながら両方兼ね備えたものはほとんどなく，どちらを重視すべきかは意見の分かれるところであった。委員会では，今回は予備研究ということでもあり，相対的には前者を優先したということになろう。ただし，タイトルは見事でも，方法についての見通しが余りに頼りないものはどんなに面白い発想でも採択にはならなかったし，逆に，発想や表現という点では不満が残るものでも，着実な方法で努力を積み重ねていけば何かは出てくるかも知れないと思われるものは採択した。

もうひとつの論点は，『社会的な意味』か『創造の喜び』かという点である。一方には社会的には重要なのかもしれないが，研究としては全く面白みに欠けるものがあり，一方には社会的な意味についてはよく分からないが，何か胸をワクワクさせる研究がある。アマチャアリズムの研究は使命感だけでは持続しない。楽しさ，面白さといった創造の喜びが不可欠である。しかし楽しさ，面白さばかりを追えば，個人的な趣味の研究に終わる。今回の選考結果としては，社会性と面白さの両者をいくらかでも兼ね備えたものが残ることになり，その点ではやや中途半端であったかもしれない。創造の喜びに徹したような研究をどう考えるかは，今後のこのコンクールの課題でもあろう。新しいものの考え方は，そのような研究からも出てくるはずである。

第3の点は，『新しい取組み』か『従来の活動の延長』かという点である。力量については未知数でも，新しい取組みを優先するのがこのコンクールの趣旨には適う。しかし，すでに実績をあげ評価されているようなチームを，それだけの理由で排除するのも理不尽である。結局，そのようなチームでも今後の新しい飛躍が望まれそうなものは採択した。かなり議論のあったところである。もっとも，新しい取組みといっても，それぞれに関連する活動の積み重ねをしているものが多く，全く新規の計画はほとんどないように思う。

この他にも，行政との係わりをどう考えるか，実践活動との係わりをどう考えるか，地域の分布のバランスをどう考えるか，などといったさまざまな議論があったが，ここでは省略する。

なお，専門の研究者を中心とした専門的な研究，あるいはそれに準ずるような申請もいくつかあって興味をひいたが，この研究コンクールの趣旨からははずれるので，採択にはならなかった。

▽　　▽　　▽

以上，選考の経過と主な論点について触れた。今回選出された18のチームには，4月から8月にかけて予備研究を進めていただき，9月にはその中から7～8チームが選ばれ本研究に進出することになる。わずか7枚の応募用紙に文章で描かれた研究のイメージが，これからどう展開しどう具体化するか，楽しみである。

（*）「経過資料①」を入手ご希望の方は，郵送料として170円分の切手を同封の上，研究コンクール係宛て封書にてお申込みください。

第5回研究コンクール　予備研究・助成対象一覧

コード番号	応募団体名 代表者名，共同者数	研究題目 （研究対象地域）	助成金額(円)
5C-014	佐鳴湖環境調査会 藤森　文臣，他33名	佐鳴湖の再生をめざして——都市化の中で，残された自然環境をどのように護れば良いか—— （静岡県）	500,000
5C-026	富士北麓紙パック再利用研究会 平井　初美，他12名	富士北麓における牛乳パック再利用研究——福祉事業への研究実践—— （山梨県）	500,000
5C-032	久慈川水系環境保全協議会 藤崎　信，他41名	久慈川水系における流域住民と川とのかかわりについて ——事例調査から—— （茨城県）	500,000
5C-037	水車むら会議 小池浩一郎，他 6名	汎用ポンプを利用した小水力利用システムの開発 （静岡県）	500,000
5C-040	女と男のトイレ研究会 広瀬　洋子，他12名	なぜ公共トイレの女性用だけが混雑するのか？ （東京都・他）	500,000
5C-044	新宿高齢者在宅サービス研究会 石川　公也，他 7名	新宿区内における在宅福祉サービス向上のためのケアセントウ（ケア付公衆浴場）についての研究 （東京都）	500,000
5C-048	都留市ムリネモ協議会 今泉　吉晴，他28名	エンカウンタースペース・プロジェクト——森の町建設計画—— （山梨県）	500,000
5C-054	古都鎌倉の自然研究会 木下　節子，他 8名	鎌倉が「リスのいる街」であり続けるために住民は何をなすべきか （神奈川県）	500,000
5C-055	八王子市・浅川地区環境を守る婦人の会 加藤　文江，他13名	浅川流域の“汚染マップ作り”と河川浄化に木炭を利用し浄化対策を考える （東京都）	500,000
5C-066	大野盆地地下水研究グループ 高井修二郎，他24名	大野盆地における水環境の研究 （福井県）	550,000
5C-075	魚垣の会 東川平正雄，他11名	サンゴ礁文化圏の自然生活誌——八重山・白保部落のイノーと暮らし—— （沖縄県）	680,000
5C-084	ガンバル江戸川アパートメント 丸山　欣也，他21名	同潤会江戸川アパート半世紀（3世代）にわたる棲み方と棲み続け方 （東京都）	500,000
5C-085	三番瀬研究会 小埜尾精一，他17名	三番瀬の埋め立てを行なう事なく創出できる市民の親水空間を （千葉県）	500,000
5C-090	函館の色彩文化を考える会 村岡　武司，他21名	港町・函館における色彩文化の研究 ——下見板のペンキ色彩の復原的考察を通して—— （北海道）	580,000
5C-092	トカラ研究会 永田　康夫，他21名	トカラの人々の心のつながりをさぐる （鹿児島県）	610,000
5C-100	家庭養護研究会 岩崎美枝子，他12名	親と社会の境界線を探る （大阪府）	550,000
5C-104	青森県木材加工研究会 中田　辰男，他11名	青い森の探訪 （青森県）	580,000
5C-119	昭和村生活文化研究会 菅家　博昭，他 7名	昭和村大芦地区における「からむし」の生産技術と，存在し続ける植物「カラムシ」の意識を探る （福島県）	500,000
	合計	18件	9,550,000円

いま，東南アジア文学が面白い！
――「隣プロ」刊行物をめぐる座談会より――

東南アジアの文学などを日本語に翻訳して出版する事業を助成する「隣人をよく知ろう」プログラムは10年を経過し，すでに100冊近い本が出版されました。

そこで，先月，日頃これらの本に関心を持っていらっしゃる内海愛子（アジアの女たちの会），小泉允雄（摂南大学），白石省吾（読売新聞文化部）の3氏に，東南アジア文学の魅力，そしてそれらの本が日本に紹介されるにあたっての問題点について話し合っていただきました。ここに，その一端を紹介します。

※東南アジア文学の魅力

司会　東南アジア文学の魅力を一言でお願いします。

小泉　僕は20年間サラリーマンとして東南アジアに係わってきたのですが，その地域の文学を読むことによって社会科学で学んだだけでは得られないようなその地域，特に農村の人達の生活が見えてきました。

白石　僕は新聞の読書欄を担当したりする関係から，世界の文学をよく読みますが，20世紀の文学の中において東南アジア文学が持つ一番魅力的と言える点は，現在の生活や社会，つまり自分の現在生きている環境と非常に深く係わっていることが強く感じられることだと思います。方法論的には不満もありますが，現在の日本や欧米にはほとんど見られない一種の熱気に満ち満ちていますね。

小泉　それは僕も感じています。東南アジアの作家たちは，かって19世紀のロシアの作家あるいは日本の明治時代や第一次戦後派の人たちが突き当たってきた伝統と近代，知識人と民衆といった問題に苦悶し，それを作品で扱っていますね。

内海　私達は，東南アジアにある伝統と近代の葛藤，そして独立運動などについて，社会科学的知識の中でイメージが膨らまないままに学びがちですが，文学を読むことによって，そうしたことを，そこに暮らす人々の顔がはっきり見える形で理解できますね。

それに，もう一つ，東南アジア文学そのものの素晴らしさがあると思います。アジアと係わる市民運動に参加している人たちは，私も含めて，東南アジアを「豊かなもの」と頭では考えているけれども，実際にアジアについて語る時は，難民問題やフィリピン人花嫁の問題というように，いつもアジアは助けてあげる対象として考えてしまいがちですね。そうした問題と取り組むことも大切ですが，私は，東南アジアの文学を読むことによって，その地域に素晴らしい文学がある事を知り，そしてその文学を通してその地域にある豊かな文化・歴史などが具体的に人間の顔として見えてくる，つまり「豊かなアジア」を実感できることが素晴らしいと思います。

※読まれる工夫・きっかけ作りを

司会　このように東南アジア文学が大変魅力的であるにもかかわらず，日本の読者に読まれない原因はどこにあるとお考えですか。

内海　私の経験から言いますと，最初に出会った東南アジア文学の翻訳本が読みにくかったためなかなか次を読む気になれませんでした。ですから，翻訳の問題は無視できない要因だと思いますね。

ただ，最近のものは比較的良く訳されてきていると思います。

小泉　東南アジア文学を文学として読んだ時，つまり，それらの本の文学としての面白さを，文章が与える感動や描写の美しさの観点から顧ると，翻訳の未熟さのために伝わってこないことがあまりにも多いと思います。

日本の明治以降の翻訳文学は，日本文学と同等に扱われ，翻訳者たちも当代の日本の作家と張り合うように良い文章で翻訳してきました。そうした先人の努力を東南アジア文学の翻訳者たちにも是非学んでいただきたいですね。

白石　僕は，日本と違う風土を前提とした作品を苦労して日本語に置き換えていることを考えれば，翻訳者の皆さんは比較的良くやっておられると思いますね。

ただ，一つ言えることは，東南アジアの文学を訳す場合，その研究者の層が薄く，翻訳者が切砧琢磨できる状況になかなかならないということは問題としてあると思います。

内海　東南アジアの言語研究者の層が薄く，翻訳の歴史が浅いこと，また翻訳者はどの言語を訳すにしても原文に引きづられてしまうことを考えれば，原文を読まない第三者，つまり，文学者や編集者などが日本文をチェックするということも考えられていいと思います。

白石　それから，装丁などの点で気になることも幾つかありますが，そもそもこうした本は，一般の書店にはほとんど置いてない。もう少し人目につくように多くの書店に並べられるといいですね。

また，日本の文学者が，ラテン・アメリカの文学に対して行っているように，彼等がもっと多くの人達に東南アジア文学が読まれるようなきっかけを作ってくれるといいですね。　（文責・姫本）

（注）当座談会の詳細については，「隣プロ」刊行物紹介8号をご覧ください。

なお，お問合せはトヨタ財団・国際助成部門まで。

まだまだ幼い日本の市民活動

――おくれている活動の基盤整備とネットワーキング――

ネットワーキング研究会　　鷲田栄作

昨年の8月から9月にかけアメリカ・カナダ・イギリスの環境保護を中心とした市民活動グループに接する機会に恵まれました。ここではその報告を兼ね，わが国の健全な市民活動を育成する上で参考とすべき点を拾ってみたいと思います。

❖成熟している欧米の市民活動

先ず第一に，市民活動相互のネットワーキングの発達を挙げねばなりません。一つのグループで次のグループを紹介してもらうという形で20近いグループを回ったのですが，各グループとも他のグループの活動状況を非常に良く理解しているのです。これは，各グループが出しているニュース・レターが大きな役割を果しているようです。例えば，ワシントンの「地球の友」を訪問した際，“せっかく来たのだから手元にある他のグループの資料もあげよう”と，「ナショナル・オドウボーン協会」や「アース・ファースト」の機関誌やニュース・レターをくれました。また，あるグループのニュース・レターに別のグループが活動紹介を寄稿したりしていて，こうしたことが様々なグループの間で頻繁に行われているわけです。そうした基盤があって始めて，一度事が起こると手を携えて活動が出来るのかも知れません。

次に，日本との相違点として，研究者と市民グループの連携を指摘したいと思います。日本では研究者が，単に研究材料として興味を持っている傾向がないわけでもありません。ところが，どうも欧米ではそうではないケースが目につきました。例えば，バークレーの「エルムウッド研究所」――物理学者のフリチョッフ・カプラが作ったエコロジカルな思想の温床を目指したシンク・タンク――は，コア・メンバーに，ランディ・ヘイズ（「熱帯雨林行動ネットワーク」）などもおり，『パラダイム・シフト』に関するシンポジウムを行ったりして市民活動に大きな影響を及ぼしつつあります。また，『生命系の経済学』が日本でも翻訳・出版されたロンドンの「もうひとつの経済サミット」のグループも多数の学者や活動家が集って，エコロジカルな市民社会の構築に役立つ経済学を生み出そうとしています。さらに，市民活動のマネジメントの指導も行っているコンサルタントや研究グループも存在しています。

第三に，こうした背景には，活動グループの法人化が容易で，在野の研究者や運動家の生活の基盤が作り易いことを挙げねばならないと思います。日本の社団法人や財団法人は設立が難しく，組織としても柔軟性を要する市民活動の器としては不適だと言えるでしょう。例えば，『バイオシェルター』という本が紹介されたケープ・コッドの「ニューアルケミー研究所」では，有機農法や適正技術の実験をかなりの規模で行っているのですが，こうしたクリエイティブな活動が営利企業や学術研究機関としてではなく，非営利の市民活動として行われているわけです。市民活動を支える分析力や企画力を持つ人材を育成していくためには，どうしても活動で“食べていける”法的な枠組を整備する必要があるのではないでしょうか？

次に，経験や技術を伝えるためのマニュアルや書籍の発達を挙げる必要があります。『草の根の資金集め』，『生活改革のためのリソース・マニュアル』，『支援グループの作り方』，といった本やマニュアルを様々な団体が出しており，一つのグループで成功したやり方を他のグループと積極的に分かち合おうという姿勢が見られます。また，ロンドンの大きな書店で，『地球の友ハンドブック』といった本が店頭に並んでいました。儲け主義一辺倒の日本の出版業界にも問題があるかも知れません。

❖もとめられている国際交流

ところで，友人のマイケル・フィリップス（元ポイント財団会長）や，ヒューイ・ジョンソン（元カリフォルニア州・資源局長）などから，“表面的なものではなく，真に安定した日米関係を構築したいのなら，日米の市民グループの国際交流を促進すべきだ”という趣旨提案をいただきました。ワシントンで訪問した適正技術インターナショナル（ＡＴＩ）の理事に「耕人舎」の村山さんが就任したことに象徴されるように，市民グループの国際交流が徐々に芽生えつつあるようですが，その一方，イギリスの「リサージェンス誌」――オールタナティブな雑誌として評価が高い――の編集長サティシュ・クマールやカプラ（前出・エルムウッド研究所）は，“日本の草の根の動きが全く伝わってこない”とこぼしていました。マス・メディアの責任もあるのでしょうが，残念ながら草の根レベルの情報がほとんど海外に伝わっていないという現状があるわけです。これが人的な交流という話になると，点と点でのつながりがわずかに見られるだけ。それをネットワークにまで高めていった時に始めて，本当の意味での交流が生まれるのだろうと思われます。

▽　　▽　　▽

以上，私が気づいた点をとりあえず列挙しましたが，こうした問題の解決に日本の助成財団の活躍を期待する声が，欧米の財団や市民活動グループの間で数多く聞かれたことを最後に付記しておきたいと思います。

▼ニューアルケミー研究所内の売店

研究助成の公募にあたって……

新たに二つの重点課題を設定

研究助成部門　山岡義典

◈これまでの実績を踏まえて

この4月から研究助成の公募を開始した。昭和50年以来毎年1回だから14回目ということになる。従来の3つの領域を統合し，『新しい人間社会の探求』を基本テーマに掲げてからは5回目になる。今回の研究助成では，これまで4年間の実績を踏まえつつ，いくつかの点で新しい展開を試みることにした。

その一つは新たに二つの重点課題を設けたこと，もう一つは個人奨励(第Ⅰ種)研究の選考に分科会方式を導入したことである。また，これまでの4年間，加藤一郎委員長のもとに選考を行ってきたが，今年度からは飯島宗一氏に委員長を，そして祖父江孝男氏に副委員長をお願いすることになったので，選考体制の面でも若干変化したことになる。

◈重点課題の設定

基本テーマの対象があまりに広範にわたるため，これまでも助成の範囲を絞る試みはしてきたが，余り明確にテーマを掲げることはしてこなかった。しかしこれまでの4年にわたる助成実績の中から，テーマの特徴らしきものも次第に収斂してきたので，今回から具体的に重点課題を掲げてその特徴を発展させることにした。その課題は次の二つである。

①高度技術社会への対応

②多文化社会への対応

現在から近未来にかけて人類が経験すると思われる社会的問題は数多い。その中で本格的な取組が必要でありながらこれまで必ずしも十分に実証研究がなされていない課題のうち，特に学際的・職際的・国際的な視点からのアプローチが重要と思われるものを，毎回の選考委員会での論議なども参考にしながら検討し，最終的に絞っていったのがこの重点課題である。

これらの趣旨については応募要項に簡単に記しているが，その内容はごく一般的なものにとどめ，財団側で何か特別の考えを提出するというようなことはしていない。財団としては幅広い考えをもち，むしろこちらで思いもつかなかったような研究テーマが申請されることを期待したいわけである。以下にそれぞれの重点課題の趣旨を簡単に述べ，参考までに現在進行中の研究助成テーマを紹介しておこう。

◈高度技術社会への対応

高度な科学技術によって支えられた社会を「高度技術社会」としてとらえ，そのような社会が人間の生き方をどのように変え，どんな問題をもたらそうとしているのか，またそれはどんな文化を創りだそうとしているのか，私達はそれをどのようにコントロールすることができるのか，といった問題に具体的にアプローチするのが，この課題である。

これまでの助成研究のテーマとしては，「医療におけるテクノロジー・アセスメントの研究」，「東西技術移転の法的諸問題に関する国際共同研究」，「航空におけるインシデント・リポート・システムに関する総合的研究」といったものがある。特別研究として2年前から進められている「戦後科学技術の社会史に関する総合研究」も同様の関心を背景にしたものである。

◈多文化社会への対応

多くの異質の文化や価値観が共存し，それらが互いに尊重し刺激しあう社会を仮に「多文化社会」としてとらえ，それがひとりひとりの人間にとってどんな意味をもつかを考え，現在から近い将来にかけてこの面でどのような問題が起こり，どのような対応が必要になるかを探るのが，この2番目の重点課題である。日本国内あるいは世界各地で進行しつつある多文化社会形成の実態を明らかにすることがまず必要であろうが，現在の状況だけではなく，歴史上の経験に対する洞察も重要ではないかと考えている。

この課題に関するこれまでの助成研究は数多いが，幾つか最近の典型的なテーマを紹介すると，「職場集団における文化摩擦と葛藤――便宜置籍船乗組員に関する研究――」，「二重文化的状況下の子どもの社会化過程の実証的研究」，「アメリカにおける日本製造企業の現地化をめぐる諸問題の日米共同研究」（P7新刊紹介参照）「在日外国人の受療状況に関する研究」，「ペルー日系社会の実態調査」などがあげられる。

＊　＊　＊

なお，個人奨励研究の選考に分科会方式を導入したのは，若手の個人研究についてもう少し独自性のある助成が出来ないかと考えたからであるが，何分にも初めての試みなのでどういうことになるか？選考後に改めて経過を報告したい。

今後の日中交流に向けて

――第24回研究報告会から――

日中平和友好条約の調印が行われて，今年で10年になる。それまで殆ど絶えていた中国との交流が回復し，その後の人や物の行き来は著しい。今後どのような交流のあり方が望ましいのか，それを考えるためにも近代における交流の歴史を日中双方の立場から再吟味することが重要であろう。去る3月12日の第24回研究報告会は，そのような観点から「近代日中交流史の諸相」をテーマにして開催された。多数の中国留学生を含む100人余りの人々が報告に聞き入った。

〔セッションⅠ〕　前半のセッションでは，戦前日本の中国への関与を再検討した2つの研究が報告された。座長はジョージア州立大学歴史学部準教授のダグラス・R・レイノルズ氏。同氏は現在東京大学の客員研究員として日中交流史の研究を精力的に進めている。

このセッションの始めの報告は「明治期日本の対中接近の理念と行動―財界と大陸浪人―」をテーマとした中国留学生・李廷江氏（中国社会科学院所属）の研

▼質問に応える李氏

究。日中双方の文書館で発掘した多数の書簡等を駆使して，辛亥革命をめぐる日本財界と大陸浪人の理念・行動を分析したもので，特に臨時革命政府の中央銀行設立構想に対する日本財界の係わりを明らかにした点が注目された。

2番目の報告は日本の研究者によるもので，テーマは「戦前期日本の対中国文化交流事業―アメリカの場合との比較―」。報告は国立教育研究所アジア教育研究室長の阿部洋氏。大正から昭和初期にかけての「対支文化事業」の変遷を三期に分け，アメリカの在華文化事業と対比させながら分析した。文化協力が文化侵略へと変質していく過程を見詰め直すことの重要性を感じさせられた。

〔セッション2〕　後半のセッションでは，華僑教育の沿革と現状に関する国際比較研究の成果が「日本の場合」と「華南・台湾の場合」に別けて報告された。座長はアジアの現代史が専門の東京水産大学教授，市川健二郎氏。

「日本の場合」の報告は，宮崎大学教授の市川信愛氏（当研究プロジェクトの代表者）と小沼新氏によっておこなわれた。本国の政治状況によって揺れ動く華僑学校の変遷史とともに，東京・大阪の中華学校と横浜中華学院の在校生を対象とした生活意識調査の結果が発表された。

「華南・台湾の場合」の報告は，まず熊本大学の大学院に留学中の劉暁民氏から福建省における僑校の沿革と現況が紹介され，続いて廈門大学の鬱赤陽氏がまとめた泉州華僑大学在校生の生活意識調査について，日本留学中の同氏の兄，鬱赤紅氏が論文を代読した。引き続いて台湾政治大学教授の林顕宗氏から，同大学に在籍するマレーシア・韓国・香港の学生を対象とした生活意識調査について報告があった。これらを通して，アジア諸国の華僑社会と華南・台湾との交流の一断面を如実に知ることができた。

今年度から研究助成の重点課題として「多文化社会への対応」を掲げたが，今回の報告は改めて多文化社会の持つ複雑な様相と問題の多さを痛感させるものであった。（当日のレジュメご希望の方は，200円切手を同封の上，レポート係へ）

新刊紹介

環境学研究フォーラムⅠ，Ⅱ，Ⅲ
『環境の安全性―その評価をめぐって』
鈴木継美，田口正：編著
『発展途上国の環境問題』
土井陸雄：編著
『環境研究と疫学―その有効性と限界』
鈴木継美，大井玄：編著
恒星社厚生閣：刊
A5判上製 141，161，125頁
いずれも 1,800円

これらの出版のもととなった研究会，環境学研究フォーラムは，当財団の助成により，1983年秋から2年間にわたって9回の集会を積み重ねてきた。代表者は一昨年5月にチベットで急逝された山縣登氏。毎回20名程度の多分野の人々が参加し，4～8時間にわたる報告と討論を繰り返した。今回の出版になった3冊は，これらの内から特に発表の重要性が高いと思われたもの3回の研究会の記録をもとに，改めて執筆・編集したものである。

Ⅰの「環境の安全性」は山縣氏が自ら中心になって企画しまとめつつあったもので，同氏の巻頭論文「リスクの概念とパブリック・アクセプタンス」のほか，地域の環境基準，化学工場における安全性評価，化学物質の環境における安全性，放射線の安全性について論じている。

Ⅱの「開発途上国の環境問題」では，編者の序論に続いて水俣からの視点が論じられ，アジアと中南米諸国の現状が具体的な研究調査体験等も混えて語られている。

Ⅲの「環境研究と疫学」では，大井氏の序論に続き，いくつかの性格を異にする研究事例の紹介を通じて，疫学の有効性と限界が論じられている。

『先端技術と文化の変容―日本とフランスからの提言』（NHKブックス）
林雄二郎・編著
日本放送出版協会・刊
四六判 200頁 750円

先端技術の発達を，これからの文化との関係という観点から考えてみようとしたのが本書である。第一部の「先端技術の歴史的意義」では，一昨年4月に開催された日仏フォーラム『文化としての先端技術』での報告と討論が再録されており，第二部の「先端技術を展望する」では「文化としての先端技術を考える会」（代表・加藤迪）のコア・メンバー5名が当日の討論を踏まえてそれぞれの展望を語っている。

全編を貫いているテーマは，果して先端技術は新しい文化を創造しうるか，という問いである。これに対する回答は論者により様々で，内容は多彩である。単純な否定でも単純な肯定でもないさまざまな可能性に対する思索が，本書の特徴といってもよい。トヨタ財団からは，この日仏フォーラムの実施とそれに先立って1年半にわって積み重ねられた研究会の活動に対して助成が行われた。

『日本企業のアメリカ現地生産――自動車・電機：日本的経営の「適用」と「適応」――』（東経選書）
安保哲夫・編著
東洋経済新報社・刊
四六判 190頁 1,500円

アメリカに立地する14の自動車・家電・半導体関係の日系企業を対象に，日米の経営・経済研究者が共同で調査をおこなったものの成果を，日本側の研究者がまとめて出版したものである。実態調査は，作業組織とその管理運営，生産管理，参画意識，雇用環境，部品調達，親―子

財団法人となった助成財団資料センター

前号でも記したとおり，かねてより“法人化”の準備を進めていた助成財団資料センターは，この4月1日に，総理府より設立の許可を得，財団法人として発足した。

同センターは，助成・表彰・奨学などを行う財団法人や公益信託等の資料を収集し，それらの活動内容につき，助成を必要としている人々や財団に関心のある人々に適確な情報を提供することを主な目的としている。

具体的には，①助成財団等の事業内容に関する資料や文献の収集・整理・閲覧，及び出版物の編集・発行，②助成財団等に関する調査・研究及びセミナー・講演会・シンポの開催，などの事業を行う。

理事長・豊田英二（トヨタ財団理事長）他，理事9名・監事2名。

▽　▽　▽

〔住所〕東京都新宿区新宿2－1－14
エレメンツ新宿ビル3F（〒160）
〔電話〕03－350－1857

会社関係，について行われ，これらの細目について5段階の適応―適用評価を行い，定量的な分析を実施している。

適応とはアメリカの方式に従うことを，適用とは日本の方式をもちこむことを言うもので，その度合いは業種や進出時期あるいは個別企業の経営姿勢によって異なってくる。その相違をさまざまな表やグラフで描き出すとともに，インタビュー調査によって得られた定性的な情報によってその相違に解説を加えている。

今回出版になったものは，1986年の秋に実施された調査（第II種研究助成）の成果であるが，この成果をベースに，今年から来年にかけてさらに本格的な国際共同調査（第III種研究助成）が実施されつつある。

『日本経済的活力』
中国社会科学院日本研究所
＜日本経済的活力＞課題組・編著
中国・航空工業出版社・刊
A5判　上製，308頁，4.7元

中国社会科学院日本研究所の4人の研究者（代表　馮昭奎）が，戦後日本の経済的な活力の源泉を求めて8つのテーマに取り組み，その成果を中国で出版したもの。経済活力の源泉を9つの項目に整理して論じた「総論」と，8つのテーマ毎に調査結果をまとめた「分論」から構成されている。1985年度の第II種研究助成の成果。

最近の報告書から

当財団の助成研究から，「成果発表助成」によって印刷された報告書を紹介します。入手ご希望の方は，送料分の切手同封の上，財団レポート係宛てお申し込みを。（品切れの際はご容赦下さい）

III-036　高等学校の進路分化機能に関する研究（高等教育総合研究会　代表・天野郁夫，B5　295頁　和文，送料250円）

天野氏たちのグループは，1981年秋から2年にわたる研究助成によって高校のもつ職業準備機能に関する調査に着手し，その後もカシオ科学振興財団等の助成を得て継続的に調査を進め，内容を深めてきた。この報告書はその6年近くに及ぶ調査研究を総合的にまとめたものである。

いくつかの高校での実態調査をもとにした第I部「高等学校の就職指導と生徒の進路形成」，既存の統計資料を分析検討した第II部「高校教育の制度的・非制度的構造と進路分化」から構成される。

C-015　東京駅・皇居周辺における都市環境下に生息する野生鳥類の生態研究〔都市に生きる野鳥の生態〕（都市鳥研究会　代表・唐沢孝一　B5　154頁，和文　送料250円）

第3回“身近な環境をみつめよう”研究コンクールで研究奨励特別賞を受賞した研究の全貌をとりまとめたもので，研究メンバーが分担執筆した論文集という形をとっている。この研究は，会員の執拗な現地調査とマスコミを動員した幅広い情報網によって多面的・立体的に都市の野鳥の生態を把握したものであるが，今回の報告書は，地図やグラフや表や写真を駆使してその生態をさまざまな角度から分析している。

お知らせ

＊1987年度個人奨励研究・経過報告会
日時：1988年4月27・28日（水・木）
場所：国際文化会館（東京・六本木）
＊日タイ　100周年記念・研究ワークショップおよび公開シンポジウムの報告書刊行

以上，ご希望の方は財団事務局までお問合せ下さい。

編集後記

◆早いもので，また新たな年度を迎えました。前号でも触れたように，今年は革運（機運一変）に当たる年。巷では早速，青函トンネルやら瀬戸大橋やらと浮き足立っているようです。

◆日本列島が一つに結ばれ，これによって受ける恩恵が多大なものだということは想像に難くはありませんが，一方で，それから取り残されたもの，それによって失われたものもまた多いはずです。

青函・宇高両連絡船の船長やこれらの地域の人々の別れの涙に，単なる哀愁以上のものを感じるのは何故でしょうか？

◆“人・もの・金”に係わる輸送の大量化や情報伝達の高速化に追られている現在，恩恵を受けるも損失を被るも人間次第であることを，再度肝に銘じておく必要があるのではないでしょうか。

トヨタ財団レポート　No.44
このレポートを継続してご希望の方は，お葉書にて財団宛てお申し込みください。
発行日　1988年4月25日
発行所　財団法人　トヨタ財団
発行者　山口日出夫
編集者　渡辺　元
印　刷　真友工芸株式会社